



松通落葉

四

1卷5
401
5上





松尾落葉四折卷

神の宮人の於こといふ聲を高くたつ事

神此宮城あしこふはくうみくをうつしふそまうつ又ハ御
饌米をまのふをりおんた於こと聲を高くたつおんがうつこ
りりつこまうつ人ども昔よりおんたうつしあまもあつたれども其
ゆゑをばあつたうえうわをばおのれとたあつてん於こといふ
うやいこといふ昔乃物語ぶつた見えつたれおんうもつたれ
人の御前あつていし申よまのつひおつたの祝詞よ稱唯と
いふをばおつたもつたれとつたもつたやうありはく聲を高く
長くいつたつたもつたつて續日本紀十一の卷承和九年乃



ありてうしあくともれんを石川を少納言ふりてしきつてうべ
なる事ぞかし神のみこととていふるはるる居らにうししたる
はうし於くと申も同じきものなりけりともいふはまゝあざむく
つるはがぶくくやまひき神のくににわたりまはるる人よき
とてうし申もあつていふ人稱唯を乎ことかてうし日
本書紀の訓點より越くといふるはるるはれどもあやまりて於
於とわくはよゆきて於乎輕重義といふ書よ見えり

神よはてまつるゝのて祝詞にいれやうふ申は事

今の世よまきる人よそのはてまつるる人なりけり
其のすくぬくはふやうはるるを申はるるいふあまふし

一の祝詞よはるるは物神よはてまつるあまを横山ヨコヤマを
置オキはるしとわくはるるいひみる明妙アキラカニ照妙テルタニ和妙ニギタニ
はるる心えぬはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる
くし神をたてまつるはるるはるるはるるはるるはるるはるる
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる
あまあつける光孝天皇乃御哥小君がきあ春の野よいで若
菜つむしが衣手に雪はるるはるるはるるはるるはるるはるる
せはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる
はるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる
ろをおひい合せもはるるはるるはるるはるるはるるはるるはるる

りつゝをりつゝはさるるれりつゝ人もさるるにさるるさるげ
あり春秋左氏傳といふ書に神ふそのたてまつりて申に
詞をよびて奉盛以告曰絜粢豐盛奉酒醴以告曰嘉粟
旨酒とさるるを見まはるはさるるの心りかるるを左
丘明の絜粢豐盛と謂其三時不害而民和年豐といひ
嘉粟旨酒とは謂其上下皆有嘉德而無違心といひ
りつゝらびらるる政とて年ゆみしかるるの
人嘉徳ありとて神に申りてんハむるのさるる
りてハりつゝさるるのさるるのさるるのさるるのさるる
祝詞のさるるのさるるのさるるのさるるのさるる

板立馬 馬代

神の社に馬をばてまつりてはりつゝの祝詞に見え今世
世中もあゆるこれ一又木をばてまつりてはりつゝ馬
ろはるるのさるるのさるるのさるるのさるるのさるる
見えりたる一これほやけごりなり北山抄一巻に天曆三
年七月廿二日月次祭依穢馬寮所進馬腰損足塞已不
中用云云令奏事由以板立御馬可令牽進者とあり此板
立馬を木をばてまつりてはりつゝのさるるのさるるの
見えりたるこれとさるるのさるるのさるるのさるるの
この馬にさるるのさるるのさるるのさるるのさるる

といふやうなり又馬代は今も金銀ちれども昔いさやうなうは
 られも同書のねる下巻に承平四年六月月次祭馬代進調
 布八端上卿令可進見馬之由後後多此例といふやう
 一にちりちり中ころりでも金銀とび人乃なごていこのまぬこの
 ねる一に布をたきひくこれ一を馬を買ふたてまつれとね
 せしむいといれちちあつてなごまつるねるこれころの調布
 八端ハ馬一にねるいこのころりかき板立馬も
 ちねるころりもこれ馬代をまつるをやめかく一にちり
 よふあつて今のいこのころりねるこれまのび城をい
 たりまは

繪馬

ちがれける馬を神の御ちふもまつるに近き世れいしよ
 あんふふ書よに見えびこも神のちなふなごまつるのり
 けりねるいこのころりのいさるれにせむらちあつたれ
 木一にまつるいもえせむれこのけりちねるねるいさ
 ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
 一にちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
 けりの繪ようちりちりちりちりちりちりちりちりちり
 ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

神の宮人の笏代々事

今ハカゞゞ此神の社乃とてどもこれ笏也とてとせられど
一ハ把笏ハおんやけいひのしあててはるひく續日本紀天
應元年のふりて令賀茂神二社禰宜祝等始把笏と見
え日本後紀延暦二十年のふりて始令住吉社神主把
笏と見えりりかもけりやゆの禰宜祝住吉乃為りるの神主
ふゞと那からうぬゆあも笏とれてて代申しはるひり
又續日本後紀承和五年のふりて春宮家令永預把笏
とてりてりも把笏おとれとてあててのら齊衡をこ
ろよつててハこれをゆてはるひりやあてりてりて文德
實錄齊衡二年のふりて乙巳制大和國檢非違使正六

位上伊勢朝臣諸繼預把笏諸國檢非違使把笏始於此
人とてりて書同三年のふりて夏四月甲戌詔諸國三位
己上名神神主及禰宜祝等並預把笏とてり此齊衡三年
の詔にともばりて大神乃宮人けりもハ高尚らけりてあてり
笏とてりてりもれど名神とてりぬるらぬ無位のとてりてりハ
ゆてりてりてりてり見えりてりてりてりてりてりてり
正一がてりてり

神はてまつることを初穂といふ事

初穂といふことハ延喜式のハ乃卷るる祈年祭の祝詞ハ奥津
御年乎八束穂能伊加志穂爾皇神等能依志奉者初穂

波千穎八百穎ハチヒヤクヒヤク爾奉置ニタテマケテ式シキとらひ見くまふ一はり稲
 穂をまぶ神よたてまつるゆゑ初穂とはいつてもつりける神を
 たふとみねをすふらんちりり稲を稲とほむはる
 らつとまぶ神よたてまつる式しつりや三代實錄十八の卷
 貞觀十二年はるるに今神社件鑄錢所ハツホ近久坐須仍所
 鑄作之初穂二十文ハツホ乎某乎差使天と見えふあま
 今の世ふ錢よまれ金銀りまきつるも式を初穂といつる稲の
 らつとまぶ神よたてまつる式しつりや三代實錄十八の卷
 初穂といつる稲の
 初穂といつる稲の

小忌 大忌

形あまれけまぶる大おれらるる小おれらるる
 かしらるる小忌ハかり大忌ハかりしと西宮記十一卷
 新嘗會の條り小忌王卿以下著青摺布袍并日影縵淺
 履等云但大忌王卿以下如恆とつるを見らるる小忌ハ
 神事あつるさるる云大忌ハつる云小忌ハ
 とつるハかりらるる北山抄新嘗祭のりらるる小忌
 少納言若不參大忌應召有例と見えらるる小忌五位以上
 在西神祇官列之次大忌東西相分如常儀と見えらるる小
 忌も小忌をさるる大忌ハ次と見えらるる云

あられきり

春田を祭る事

いづこハ稻の田にまねをむくはれハ世にまねをむく
いづこハ稻の田にまねをむくはれハ世にまねをむく
神のはりりきりて苗をく生きをぬきしはまがふり
とぶふこくぞうし堀川院初度の百首をくちり

見こくせバ小田のあけらまらしてはひまはふかりり
谷水とせくろロいづこくちり小田にまねをむく
とくまら哥どもは見えりつみへのはまをむくしやぶ
とくいづこくちりハれ神をまらしてはひまはふかりり
儀制令ふも凡春

時祭田之日集郷之老者一行郷飲酒礼とゆ

千度被

中々ら世に陰陽師乃そのひまらむくはれハ世に
そはつこくの大被をまひとれり人々大被をくちり
やれものをふりしりてはれくちりむくちり物語
ぬきに見えりはれハ世に東鑑に被始行御祈
禱大中臣頼隆勤一千度御被頼隆大神宮
祠宮後胤也とゆ一千度被ハ
中々らや後乃あけらまら千度とゆくちりむくちり
うきりくちりてはれハ世にむくちりむくちり
人々をむくちりハ川にゆきりハれハ世にむくちり

みづのいさむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
ろえむらひのいさむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
三代實錄十四の卷
貞觀九年十月七日みづのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
有犬産穢不發奉伊勢太神宮幣使明日可發故更齋修
禊とある所見多し一はみづのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
とて大被をいさむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
年のいさむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
入於齋院仍停祭事とあり淳和院のやむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
とあり其のいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ

あつむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
あつむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
深くあつむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
あつむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
延喜式三の卷凡甲處有穢乙入其處謂著座下亦同乙及同處人
皆爲穢丙入乙處只丙一身爲穢同處人不爲穢乙入丙
處同處人皆爲穢丁入丙處不爲穢と見ゆまづいさむらひ
あつむらひのいさをしを神にほさる人どもいかにいさむらひ
三代實錄二十六の卷貞觀十六
年十一月十六日建礼門前大被り先是十月二十七日
木工寮史生出雲嶋成死喪家人入寮寮官人入内裏

代よりうごたれちるれば直會れどくぬるし候ひはしるる
まぶらひのこれいさしゆれを阿佐女と申すをありてはゆらけ
人ねを能はぶめしよ

比々奈

今の世三月三日は女形といふのついでにきくして比々奈とかし
つふまづ。このゆり此事おのまがゆらひとねるゆらといひて
上巳のまゝといふ。三月はまぶらひの巳巳の日おせしを
をとるうらう三日はわづらうてまぶらひと申す中ころる陰陽
師のまゝすれゆらうとてに神代まつり人ごをとおやる其
人ごこれらひを比々奈といひて神をまつるかこいゆらう

よ神のまゝくゆらひまぶらうてつる。このふなりゆられまうゆれ
りゆられまゝとする。源氏物語の若紫の巻より源氏君の
詞よりごたまよをうたゑあどあゆらひまぶらびるごす
とてゆらひゆらまぶら紫上ゆらつとをまぶらふことまゝ比々
奈ゆらひゆらびるまぶらまぶらゆらなかりはる世乃あゆら
ゆらゆらゆらまぶらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆらゆら
まぶらゆらあゆらゆら江家次第十七卷立大子ゆらゆら
或幼宮時以女房爲陪膳云云奉帳中阿末加津云云但
有常阿末加津土器撤其後供比々奈とゆらゆら見も比
比々奈ハ阿末加津乃たゆらゆらゆらゆら人のまゝゆら人

名次されし姓を後よすし公式令は凡授位任官之日喚
 辭三位以上先名後姓謂假令喚云奏萬呂宿祿之類四位以下謂五位以上也先姓後
 名以外三位以上直稱姓謂直稱奏宿祿之類也若右大臣以上稱官
 名四位先名後姓五位先姓後名謂喚云奏宿祿萬呂之類也六位以下太
 姓稱名謂直言奏萬呂不稱宿祿也即授任之日及以外并皆通稱也唯於大政官三位以上稱大
 夫四位稱姓五位先名後姓其於寮以上謂辨官以下也四位稱大
 夫五位稱姓六位以下稱姓名司及中國以下五位稱大
 夫謂一位以下通用此稱とらふと見らふは乃らふはさうてよすねら
 續日本紀の詔詞は佐伯今毛人宿禰大伴宿禰益立とみえ
 續日本後紀の詔詞は藤原常嗣朝臣小野朝臣篁と見らふ

するごとく四位と五位とのけらふは公式令は以外云云と
 らふみえらふふなん授任の日なりぬら朝廷みてみえら
 あらう處らうはあらぬら今に見えらるがどららる姓
 のもあらん官も位もさうやういふ八名の後よつて後よつて
 らは其例ハ源氏物語乃須磨の巻より行平れ中納言と云
 ひます鏡おらみ下の巻より有家の二位定家の中將といふ
 られらういふやうにあらぬの人ふらいてハ官姓のといひ
 又大夫といふといふもさういふもさういふもさういふもさ
 てハはなれぬられを名次されし官位姓おら後よかると又ハ
 たらがし大夫ともかきぞらぬらさういふとらういふとら大

みぞありははさううに朝廷のやうふささこゆるなり又うり
てハ公家トてちとどりねらるいふまゝ御方をゆつてもいひら
甲陽軍鑑よ公家近衛殿といふ家これなり今ハもさうに此
うとふかとうりさうり

そのぬ らむらひ

世の人老武士をりつふしつりのひらとむさふねさ
たぐり物部ハ武士の官名ぞせりりれささバそのまを武
士とれども武士ハこれ物部よあはれ日本書紀雄略天皇の
巻ノ物部兵士三十人と見えさるも兵士ハりのぬあぬ
うしゆあぞうし獄令よ凡徒流囚在役者囚一人兩人防援

在京者取物部及衛士充 謂三府 衛士也 一分物部三分衛士在外

者取當所兵士分番防守とあり物部ハ衛士よたぐいひあ
あつたハ當所兵士といつてよとてわねさうはさか
つてくのくれ丈ハあつた兵士よバはさるのとうれささ
さけんでふいん今ハうらと武士はこれさむいもこのれ
はちた人トつてさうらうはさむいもさういひつたさ
ぞし大鏡ハの巻ノ此ころもさやれ人ハねさゆさげやと
はささむいひのいひとあまバささむいひつたさ

長上

ちよの長上といふを其とてねる人をいふ事とねるさみ人乃

かろやうは名つゝ何のゆゑに...

祖のあざれをつく事

今の世に... 三左衛門... 神日本磐余彦火... 火出見尊と申すも...

みらぬみよ... 何のゆゑに...

男手 女手

ひし書に男手よか... 宇津保物語の國... 譲の巻にその次...

とつりし考ふ枕とらつと源氏物語乃桐壺み巻よやと
 ちのそとさりらるしれ哥をもたそのすぢぞ枕ぞんせさ
 をばまよこいほくよそののそとひきびくまにまをこ
 びうれいのめぬさしとほくはひうさふらち
 ろて見るとすしねを記さるるも城すすまぬらふ
 こそころやなうれくもさうしふまのひにせり
 くののねまば枕冊子といふさしあどあつるこは
 かよめさるやとらるはれそのあつねを書の名もさ
 くの人の枕さうしといふねささひ言まて何ぐけてむ
 といふるみさる清少納言のふもやうより注釋もれ

られやあまど枕さうしといふゆきをこれとてさうふ
 書よ枕ふるせし侍らるる枕冊子といふつづて
 づさるる詞書さるる人のされひひの枕ふも
 りいさるるし榮花物語さる枝の巻うさぬ若はさ
 らるるさうらるるなうらうしひみふ城まうはらう
 らるらあふはらんやうらうと見えさるるめぬさ
 をはくさるるひにさるるあつあつひのさるるさ
 らるるさうらるる

本みせし

らるるさうらるるの本あやさるるさるるさるる

とそはまにうらねふうかこよ本のまゝとかきとるは
いふくもさやうおんうつがの物語に樓乃上忠卷よか
ぬい本にまゝなりといふ語をゆむ一本といひ今いふ手
本のおとりのねもあれどまは手本にまゝありといふ
らぬり同物語國讓の巻も手本にまゝなりといふも
る紙本をこそまづそのせうおらぬまゝなりといふも手本をこそ
うらぬなり

夾竿 鐵尺

けいさんび今の世よりいふさんととてねえうつひ見まげ鐵尺
みく夾竿よりあぐげ鐵尺ハ江家次第第五の巻列見れり

請印の事とてとらぬ外記授管史生開文置印盤上以
鐵尺鎮之カキシバカクと見え同書十八の巻外記政おぐり史生取
文置案上以鐵尺置之とてとらぬをねえいふとてとらぬ
今いふさんとつりのふ同ドリとていふ同書四九卷よ置刀執
筆書之刺ハサミケラサニ夾竿置之同卷よ次改正召名削除刺夾
竿儀准上とてとらぬ
見え紙にさむむそのあぐりゆ其より此巻の頭書に
夾竿長三寸以竹作之以絲結之或以紙捻結之兩説也
と見えとてとらぬねえとていふも又清少納言枕冊
子よ御さうしおふさんといふもとてとらぬなりといふ
らうし紙をまふさんにもさみあぐりあぐり江家次第よ見

びぞはあちれさて後をくし新銭を鑄きむひくハ度ど
とふむのをゆゑた錢十ふゆづべしとむせごとめつてハ
錢を貴くあさんとのみくくひとぞれしむくむくささい
厚くく人の用いざれむかり續日本後紀承和五年のく
だりし勅畿内諸國雜官稻代收錢一切禁之と見えたる
と民どもれくくひく貢よ收をそむもどゆり用いトク
するゆゑとまきむぬ今の京よかりくすくむくばらむしハ
旅とる人のくむひだらむらむかりのつかりくやむり
もふりぞゆりくく年とつむゆりし世に中小錢と
けりかり金銀をも用ゆるやうにあらむもあつとく

書いたむる人のまかりくむらむらつてつるのくあく今の世
みさむらむらくくむらむらゆのれそのある今昔物語
金壹兩たり米三石にうらむをそて家城ふひま
あむを見ぶり金ハこのむ人のむらむらむらむら家ハ
かひがくくくくこのむ人ふらりて價の米りて家とばいひ
りれさり北山抄調布八端を馬代はらむらくし見え
るも錢金銀を馬ハかひがくゆゆとくし上むらむらに
ふらむらくくくくくくくくくくくくくくくく錢城
免金銀をむらむら人むらこのむらむらしとまむら
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

らぬ事どもすねる今世の人ふらぐべてハチとねく心ハあふ
く正しくつうえんとぞおのちもまかづらば世れさゆとまれば
ふふれ書らむなうとかなるこふしりまきバ錢金銀のあふれ
やうをかゝるがしといふよあふ

金百足

今の世り壹歩金といふよむらつと百足といつりこまハ此
金をとどめくはくせあまうとれた百足にうりしういそ
しつらにうりていれそあつとあつとどありつと百足といふハ
錢壹貫乃こふちんつとて草上師匠死よと申小錢二百
貫と坊とつとをいづつたうらふと坊を百貫にうりてくれと

三万足をいもうらねあしとほぢあてといつる銭見さあづ
百足の錢壹貫よどあつたさそ又つんでよつとん小判壹兩ハ
り砂金壹兩城とつとつとれりのそあつといふよねん壹兩
ハとつりにとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
といつ又天武天皇紀り儲用錢一萬斤といふと見え
今昔物語ハ錢五千兩といつりあづし錢城けあふても
うとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

かまー

うねくハ身ふまてねとつとつとつとつとつとつとつとつと
け意味いふやうなれどままハこまに身よしみまおぼあれバ

攝政はるやうなすひしとれよ此東三條殿はつとことどもさふち
られさせもさひく増鏡あれう川の巻ふさづふハ花よのよと
りやとをうと

かひしし
うひししはかひさくともむしそり今の子つとをさ
らうすしとあふなりま鏡老の浪は巻しとあひしし
り宮うまれさせなすくまばうさうとさくねがえれ今鏡子れ
日の巻に二人のむえ宮とら二代の帝若后よねとすいいと
うひししれ御ありさるあり又つとせぬ浦され巻にのれねし
まうさうれいさせさうとぞうひししとかんざらあさうい

たるといふれと見るとしてあさうし

うこと

此詞をむしとらうとれえとれ人あり古今集の哥は
このまをむし説餘材抄打聽遠鏡とれとらうかび師の古
事記傳ハの巻にとれとれもはくとれ詞の古書や古哥やふ
見えとつしむさひしと考ふにかとていさうとび思
ふことのみまうししとあさうとらうとらうとらうとら
えとれとれとれとれとれとれとれとれとれとれとれとれ
集わるとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら
新釋にらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

むのさうりゆん

いづや

古哥古文一つぞともいづやとていふに心よめたりぬちと
あつらひしやがたきその事をつひづるをりの發語もぞ
あつらひしやがたを六七百年の哥とみいこれをとら
發語とていふて哥にのみ文みかくしにうねもぬぞわ
る古今集此哥よつと人のあふのまぞとれ月艸のうつ
ころのいづれとていふ源氏物語帚木の巻一いづや
かこれとてわらふまがたはるげなる世をも君ハ世はるぞ
といふあつらひ見考つともまがた古哥集物語ふも此詞の

あつらひ見えたる中よいとかろくはるるハ其ころとあつ
らひ見えぬもあれども見えばわが考おとくあぞあり
もれ

むらんはりのいもまがたしれあり事

いづれのいづれもいづれ中よわらなる文をわんふと昔
人のまがたのい言もまがたよまがたをわらひてそのは
べーたつバ今の世よ庚申待をれ八月十五夜月見をれとい
をせりハ庚申は八月十五夜といふたがひるり榮花物語
花山は巻一りつと人々年乃とてあせる庚申なりせとをた
つとせバさうとて御方とてれせと勢なまよ大和物語

院より八月十五夜せられしと云ふ歌見よ

歌をつくること事

宇津保物語の吹上り巻より歌つくりの歌より
よめをせしむるも思ふほどなまよひの心
いさめなりしをばよしのゆゑにむしりて
こゝろみづくればもと古歌よりの歌は
ひとをばとせしむるも思ふほどなまよひ
かきば歌のつくりしを正し日本書紀顯宗天皇巻
ふも詞人の歌はつくりしを正し人乃らみづく
がふさるゝとせしむるも思ふほどなまよひ

ゆゑよ中よりつくりの歌をつくりしを
文をつくりしを正し人乃らみづく
かきば歌のつくりしを正し人乃らみづく
たふんげりしとせしむるも思ふほどなまよひ
おごり

記録所 領家地頭

延久のころみづく記録所といふころをば
免ハ天皇乃御まづりしを正し人乃らみづく
きひさしこのころもつくりしを正し人乃らみづく
はまづりしを正し人乃らみづく

と朝廷に申すは、東鑑に、
常ふ地頭不當無極之所多候又地頭尋常ふ年貢
不致懈怠所も候而領家乃中ふも地頭惡之乘勝て
訴申事も候之由承及候也然者記録所へ被召候了決
真偽御裁許候者不當地頭ハ成恐て云云九月三日頼
朝と見えり領家といはれりその國郡を去る人
公家衆多し地頭といはれ頼朝卿のいふて國郡小國司
領家ありり守護地頭とてあておとる人成りたるに
さうと紙が年の貢をもとくして國司領家よはげ兵糧と名
づゝとふもといふは民の貢ハ此時よりぞおとるに

り今世ハ領家といふは地頭ハさうとふは
てた領主地頭といふ名はさうとふは

莊家名主

莊家名主といふハ守護地頭乃さうとふてこれとて
ふさのあもといふは、莊家ハ延喜のころよりあり
ゆるれども守護地頭といふは其まゝにありて
そのころハ昔ハ郡れうらよ莊ありてその莊にうらに名あり
いかりれは、東鑑に新屋莊永平名松永名とかりり
同書に鹿嶋社領名主貞家といふと見え又同書に子細
莊家皆存知といふは此ころハ莊家名主守護地頭あり

ふもらひされ印をばらひしとてねらる又文成ふらふて
印をされも今乃世は同どわらふし若印も人其身のほふ志
ふらひらひされが中あを大小はらひあふしにこそはて
るれ印はあつらひはたのえ乃名若文字あふしと地より源
氏物語橋姫の巻小此袋を見あふしをかくれせんまらふを
わいて上といふとてあふしはらひをかくれしとて口はこそ
あひまらひらひ御名乃あつらふしとて御名のあつらひしは
あつらひ名の印をさしはらひをさしとてあふしはらひはらひ
紀持統天皇の巻小神祇官より木印をさしとてあつらひしと
見えぬもばさてはらひあふしはらひまらひはらひのハ木あつらひ

つらうらんし

白紙

あつらひはらひも印さぬは白紙といひは續日本後紀十四
の巻承和十一年のうらうし主水司言司家之政觸類繁多
而本自無印只用白紙事涉輕疎未免嫌疑望請准内膳
采女等司被給件印者勅空宛之これを見てあつらひ白紙
といひはらひはらひはらひも印なむとて人乃うらうし
とてあつらひ

袖書

袖ハ衣のかさしとてあつらひはらひはらひはらひはらひ

酒のむさわり三度三獻の事

神と杯の酒のむを一度といひ三度のむと一獻といひさかみお
たる座してはづとて一たびづししむとて一巡といふる
その儀式よりいしくのむハ三度と三獻とあどりりる
西宮記一は卷ふ薬子嘗之次供御第三度と見え大鏡六
は卷り御加茂詣の日ハ社頭より三度の御らけ空よ
てまわすことせむをその御時ハ祢宜神主も心え
大らけむとせむるなり云云とありて見むを三
度ハ酒のむさわりおん西宮記一は卷臣下大饗のむさ
ハ三獻間客人不動座四獻以後諸卿起座獻盃と見え

三獻もさかみ酒のむさわりとて又同記五乃卷定
考むるより三獻後居粉熟飯數巡後居餅餠と見え北山
抄一は卷二宮大饗はさるるは三獻後有音楽數巡之後
云とていふを三獻よりいしくのむをさかみ度と
くづさかみとていふもさかみとていふも大らけは
すりハあつちさかみの北山抄ハ節會酒巡不過七許巡而
今日及十一巡王公唱哥擊笏公宴酒興延長云と見
るさかみ酒といふはこれのむさわりをいふとてさかみを
さかみとていふはさかみのむさわりとていふとてさかみを
さかみとていふはさかみのむさわりとていふとてさかみを
さかみとていふはさかみのむさわりとていふとてさかみを

いこもあれた三度三獻とかきりくはらうあやういぶるけ
に酒のよりハすびくもくわきつてもまどがてハあふあふ
あふぞあはるる胡盧山といふあふ人の酒飲微酔花香半開
といひハがたさるるさきりし

上戸下戸

酒をくむのむ人を上戸といひえのふぬ下戸といふは
百姓の戸口といふふその口は多少ふらうて上戸中戸下戸と
いふそのりうりうバ酒のむくは多少をりりあふくく
ふふねん戸口の日本書紀持統天皇の巻は大臣を
つぎし宅地をばふふをいふふりふ至無位隨其戸口

其上戸一町中戸半町下戸四分之一といふは見をる
び

くらあまび

くらあまびハすす鮫ともいふあまびともいふくく
くらあまびのりりくくそのくくすくはる鮫るれ
かいつくすといふは今ハのくくくり延喜式七巻卷
踐祚大嘗祭みくくり不薄鮫四連生鮫といふこの薄鮫を
生鮫ともいふつまのくくくくくく西宮記七巻卷
御飯よりくくは鮑羹を供きれり見え又ついで草み
らく最明寺入道はが岡乃社叅のついでふ足利左馬入道

みまゝに御使をつりてはちいしくりりるにあらま
けられとては家やう一獻にうち鮑二獻ふとび三ちんりうい
りらひとてやまぬとつり此初獻のちち鮑とると鮑羹を御飯
ちりさふふ供とると合せとありや今世のせりづりてま
らうとの來りつりすたにまづの鮑をつひては昔よりけま
らりこれたごりいぞつらんきてついでよつらん左馬入道の
三獻のさゆを見ま昔まあどまうけりわらとるおま
ありい今もつこれつりあぢはるるは成まぶしのみふよの
つり心をつりてとつりつりつりつりつりつりつりつりつり
やうにちせありがさうつりつりつりつりつりつりつりつりつり

園とてはらうとふらうつりつりつりつりつりつりつりつりつり
ハミのふかぢはつりつりつり

粥

むら乃物語つりふかゆとつりつりつりつりつりつりつりつりつり
此粥とありいつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
るふつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
あつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり
つりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

む月のめらひをがととつりつりつりつりつりつりつりつりつりつり

かんざんとつゝ衣の色黒と事

今乃世よめつゝ奴にさす衣かんざんと名づもさあ
其色くらふはゆめく乃わさるちり日本書紀持統天皇の卷
尔詔令天下百姓服黄色衣奴皂衣皂儀制令も家
人奴婢奴婢橡黒衣橡とゆ

扇つゝはなまわさと事

捨扇をも夏の扇はかきりともさへ扇とつゝふとさ
つゝざらつゝしいあつゝ冬も束帯乃をりさつゝこれ
はさつゝおろしとせげうりりいりいをあされさつゝ
つゝさつゝむらさきとつゝ續日本紀二十四の卷天平實

字のくろり御史大夫真人淨三以年老力衰優詔特聽
宮中持扇策杖と見えつゝ年老者扇つゝは夏乃
あつゝれきとつゝれバむらいのつゝねさどゆるなつゝ
なつゝかきつゝを夏の扇といつゝ清少納言枕冊子に見ふ
つゝさつゝさつゝさつゝさつゝさつゝさつゝさつゝさつゝ
物語音楽の巻ふつゝ乃をゆつゝをむらつゝつゝいふ
さつゝいあつゝさつゝさつゝさつゝさつゝさつゝさつゝ
扇つゝをむら書みあつゝさつゝさつゝ北山抄七の巻
著廳之間與傍不語輒無用扇大鏡三巻にうら見のれ
つゝ馬乃もつゝさつゝさつゝ扇たつゝつゝひてとつゝなつゝ

しをねむきど同八れ巻よまううづほり扇うちつひつ見
うりうりもゆれ云云うづほり扇夏の扇乃うとちうみぞゆ
てき。

笠

かされしうらさしあうとれ人のいさぬがさねがさにかん
こぬがされし衣笠内大臣とささゆ人若おとせしにうて
衣笠キヌガサと心うらうら和名抄華蓋和名岐黄帝征蚩尤時
當帝頭上有五色雲因其形所造也と見えつうくれさぬ
しつねをいふものつう絹笠ちり儀制令ゆり益皇大
子紫表蘇方裏云云親王紫大六綱一位深緑三位以上紺

四位縹四品以上及一位頂角覆錦垂總云云唯大納言
以上垂總並朱裏總用同色と見え衣をわひしうら
よらぬ頂角覆錦とひ色バうづうハそあう絹りそとら
かりねががさつてすうら文化八年れう月小京にまかり
をらうらバかもし祭見よゆらに勅使管のおほがさる
せられまらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
久しうすれうらうらうらうらうらうらうらうら西宮記十
一巻小菅簾公卿及祭使御禊前驅持之白鳳制云三品
已上聽管簾とら
れうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらハ

とぞ志すべし紙筆のみにあはば探韻をいへり土器
を居柳筥といふこと同記に見えまは鏡老乃浪老巻めを
志るもみ御座を柳筥ふと志すともいふ

時より鐘鼓のついで

今世時をつげまはりて鼓はるのあり又鐘をうらまはるを
印しやう形はるべしハ時を鼓剋を鐘と志せしもの
かゝるついでに剋を志せしものこれやめしものあや
ついで時乃より鐘をもうらまはるこれハ鼓を正しついで貞
觀式ハ凡知時以鼓示剋以鐘以鼓者肇九而畢九といふ
を見しついでハ乃やう形はるべし日本書紀天智天皇乃巻

漏刻於新臺始打候時動鐘鼓といふとバとめたり鐘
鼓して時剋はるらるり職員令も漏刻博士二人掌
率守辰丁伺漏刻之節守辰丁二十人掌伺漏刻之節以
時擊鐘鼓と見えし此守辰丁をとれりといふ

山より

哥よやうりといふことハ續日本紀五の巻元明天皇の和銅
三年ハ初充守山戸令禁伐諸山木といふ其ころといふ
ころついでしといふ

星隕天文といふ事

日本書紀天武天皇乃巻ハ昏時七星俱流東北則隕之

るにともども流星と名づく星はあまの隕るやうに見ゆは天文
亂るもいひゆるんといふより名ある星れうせぶれと見え
流星は海をのりてあふぬけしといひあまのついでにや
あまのしほし日本書紀し七星俱流東北より流るるに續
日本紀亦天衆星交錯亂行无常所に見えり七星又ハ
常所ありてあまのついでに見えり七星俱流東北より流るる
ハ火氣ともねともいふは火氣のあまのついでにや
天狗のともいふはあまのついでに見えり七星俱流東北より流るる
嶋氏ハ名を好謙といひて天文すねびをさえて世に名高
しとせよともいふはあまのついでに見えり七星俱流東北より流るる

つらうあまのついでに見えり七星俱流東北より流るる

化物

神代ハ草木石などいひて後ハ欽明天皇乃御代
ハ禹武邑人採拾椎子為欲熟喫著灰裏炮其皮甲化成
二人飛騰火上尺餘許經時相闘といふ事ありて日本書
紀に見ゆはあまのついでに見えり七星俱流東北より流るる
あまのついでに見えり七星俱流東北より流るる
又狐狸いさくをさ
とて年經る獸人なりあまのついでに見えり七星俱流東北より流るる
推古天皇紀ハ陸奥
國有格化人以歌之と見えり此はあまのついでに見えり七星俱流東北より流るる
とぞいふ也

幽靈

世の人若幽靈といふもの人乃其魂其かちをけりて
あつてをけりてをけりて此書り見え又今もすく見つかう
くうれりてけりてあどかた人もあるく大くはくみし
あつていふ又い何ふまねゆく心をのこして死めり人のたま
みあつていふあがけりてたまにたまにたまにたまにたまに
いふ又いけりて心のたまにたまにたまにたまにたまに
あつてのたまにたまにたまにたまにたまにたまにたまに
あつてらん高尚がけりてたまにたまにたまにたまにたまに
あつてらん世界よりけりてたまにたまにたまにたまにたまに
あつてらん神とけりて

とて此世あつていふものあつてはらげ神のあつて見え
たまにたまにたまにたまにたまにたまにたまにたまに
神乃けりてたまにたまにたまにたまにたまにたまにたまに
あつていふ神みたまにたまにたまにたまにたまにたまに
あつていふ幽冥のたまにたまにたまにたまにたまにたまに
あつていふあつていふ春秋左氏傳に趙氏の先祖あるたまに
あつていふあつていふ晋景公の夢み見えたまにたまに
あつていふあつていふ孫不義余得請於帝矣といひて壞大門及寢門而入公懼
入于室又壞戸公覺召桑田巫巫言如夢といひたまに二を
あつていふあつていふ晋侯乃趙同趙括けりてたまにたまに
あつていふあつていふ此事成公乃

やさしくい延喜式十七卷一腰車一具屋形長六尺
廣五尺
 と見えたり土佐日記の船やことありたり人形の事と同
 トてふく海人の屋やびんぶのやうな形を那に記されたり
 かり月詣集の哥に旅やるといふもついでに旅のうりに屋の
 かたらしむるのほろくやうに記されたりいふやうにせぬ世に
 ありてもほつひの形をいふまうに記さればこれ車乃屋
 形と同トて記されたりは或甲陽軍鑑ふれ人の家と屋形と
 ありてふまうに殿づつありてふ人若屋形とありたりとの
 とあひくらへていふにきりたりとていふに記されたりいふ
 今もさつりいふに中々ゆまの書やと見えぬことあり

一家

今の世に親族どもかゝるに一家といふはゆれ世たりといひ
 たりともいふをいふに記されたりいふに記されたりいふ
 つきあはれり北山抄三卷一左大臣跪長押上右大
 臣跪長押下兄弟之間其儀不同一家之説何異乎と見
 る榮花物語衣の珠名卷には此大納言殿入道殿を一
 家といふに記され御事どくしといふ

猿樂

ちかぐちをいふは猿のまねしていふに記されたり
 さる名はいつらんさるのち此は記されたりいふに記されたり

いざれわきどそのおやあるゆゑなりすづくをうへとてしるを
猿樂といふゆゑあざむらにけるる宇治拾遺に陪従ハこも
こそつていひあざうこれハ世にあらはるのさうがけりやをいつる
こそあざう陪従のといひてしる猿づくといひてあ
まてあざう猿樂といひてしるこれハあざういひてしるが
のあざいのをうへたまこといつハ西宮記四の巻相撲れんご
つてしる種々雜藝といひてしるあざう左見蛇樂散樂右犬吉
干といひてしる四の巻の藝あざうなり同記ハ散樂侍臣五位
六位童相拔走并弄玉と見えしあざうこれハあざうを
いハあざうをいひてしるあざうハ三代實錄二十八の巻に

右近衛内藏富繼伎善散樂令人大咲といひてしるあざう
らまの蛇樂犬ハ蛇れまの犬のまねをせしあざうん吉干ハ
そのあざうをいひてしる今世ハ能といひてしるあざうをい
はるそのあざうをいひてしるあざうを猿樂といひてしる狂
言の藝あざうをいひてしるあざうを猿樂といひてしる後ハ能
なりといひてしるあざうをいひてしる

あざうを 椎まば

椎まばを推しむれあざうをいひてしるあざうをいひてしる
してあざうをいひてしる小枝を折るとしる薪とすあざう此木をいひ
名があざうをいひてしるあざうをいひてしるあざうの木をいひてしる別りといひ

なぐら高砂の山とちそいづるを

都はつて

うつなれ物語吹上の巻より都のはとふ何をせんとかりよかり
とふなれをのねりつづべいとくハ京より紀のくまのりてせいで
あり又同巻にてつとむびりのまぢれ京づとふ一のづらうん云
とく家ハ紀の國より京へそとくはとわらうらうらとわらわ
たぐひあれどかたうらとくともいふやまのくまのり

見らる

甲陽軍鑑よ山本勘介がうらくまけ軍めを見らるり状とく
してぬとくまぢべいとくつづふとくあまもたぐひのこくハ

何事をちれよも此見らるりといつてを心をあつらんハ
いつてあやまれらハいつて

今の世れ武士の兵家は書とむらうん

いつてうらとくまぢべいとくまぢべいとく今れ大御代よたぐひ乃つて
づらやうらとくまぢべいとくまぢべいとくの來らうらとくまぢべ
いつてんもとくまぢべいとくまぢべいとくのほつねとくまぢべいとく
ちつてバ武士ハ兵家の書をもとく見てとくすぢぢとくまぢべ
國とれ守らうらとくまぢべいとくまぢべいとくハ太刀うちうらとく
くたぐひみとくまぢべいとくまぢべいとくまぢべいとくまぢべいとく
る人何らとれとくまぢべいとくまぢべいとくまぢべいとくまぢべいとく

之道先戒爲寶といひ又不和於國不可以出軍といふ事
だにさるる事あり守はるる事あり人乃ち小事哉といふ事
まじくあやうくいふべしやとぬくむ事いふべししかる事の中
そむしーかぬぬるにちーんまむれちそのしあらんいふべし
まじしーくいふ見ゆれど大なる事をいふべしとてあんな同書
よ以見占隱以往寮來といひ三軍之災生於狐疑といふ事
此ふ事の事をいふ事一かりかりかたかた何よるれしもある人
まじくまむれちあんな見占隱といふ事やういふ事の人乃ち
秘はるる事ありしをいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
めらひいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

とらげよむ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
くさうむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
もむ世の事をいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事
も七書をむむといふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

驛路鈴

續日本紀三十九卷の慶雲二年に給大宰府飛驒鈴
八口傳符十枚長門國鈴二口と見え續日本後紀二十乃
卷に嘉祥三年に給りて賚天子神璽寶劔符節鈴等奉
於皇太子直曹といふ事をいふ事いふ事いふ事いふ事
みたりしもの事をいふ事いふ事いふ事いふ事いふ事いふ事

まこと何をあらたまらずに
おぼろげにわらわをゆき
年々まじりてふきまらぬ
大いなるまじりておぼろげ
をやはらしくあつては

松乃落葉四行卷終

皇漢洋今古書類自家積年
藏帝ニ充棟載車、
程清廉以テ四方君子、
愛顧ニ待ツ

文榮堂藏版

東區南大寶寺町四丁目十九番屋敷

阪府書肆 前川善兵衛

